

## 論文内容の要旨

申請者氏名 矢吹 章

---

論文題目 高齢者の心理社会的発達に及ぼすライフストーリーインタビューの効果の検討

### I 序論

**問題：**超高齢社会において、高齢者が自身のそれまでの人生を見直し生涯発達のステップアップを図ることは、自我の一層の成長と生活の充実感を高め、“幸福な老い”という到達点を目指す上で有意義と考えられる。生涯を振り返り人生を見直す手段として自分史作成の効果の説く所見は多い。山田（2000）は、自分史作成者が習慣的登山者や何もしていない高齢者よりも心理社会的発達度と主観的幸福感が有意に高いことを指摘し、このことを自分史記述に含まれる想起と内省による効果の反映とした。しかし、自分史作成には、強い意欲、文章力、持久力等が必要であり困難が伴う。

自分史作成同様に生涯を振り返り内省するプロセスを持つものとして、聴き手に人生を語るということが挙げられる。その方法の中で、統合を促すことを目的とするライフレビューが心理社会的発達を促すためには最適と考えられる。しかし、ライフレビューはエリクソンの漸成発達理論に基づく質問や評価を促す質問を的確に行う必要があり難易度が高い。一方、語り手と聴き手との信頼関係が重視されるが、聴き手に技法の習熟は特に求められないライフストーリーインタビューの方が取り組みやすい。

ライフストーリーインタビューの先行研究には、Kaufman（1986）や原・小野・沼本・井下・河本（2006）があるが、いずれも事例研究にとどまっている。そこで、本研究では自分史記述やライフレビューよりも取り組みやすいライフストーリーインタビューを行って、その効果の量的な検討を行うこととした。

心理社会的発達への効果測定には、エリクソンの漸成発達理論にもとづいて作成され、心理社会的発達段階の全8段階（信頼性・自律性・自主性・勤勉性・同一性・親密性・生殖性・統合性）をカバーするEPSI（エリクソン心理社会的段階目録検査）を用いることとし、主観的幸福感への効果測定には、「認知・長期」（人生全体についての満足感）、「認知・短期」（老いについての評価）、「感情・短期」（心理的安定）という主観的幸福感の3つの要素全てを含むLSIK（生活満足度尺度K）を用いることとした。

また、ライフストーリーインタビューの有効性の範囲を探る観点から、個人差を構成する重要な要素である性格の影響を検討することも必要と考えた。

**目的：**そこで、本研究では、高齢者の心理社会的発達と主観的幸福感に及ぼすライフストーリーインタビューの効果、およびライフストーリーインタビューによる心理社会的発達効果と性格特性との間の関係性を検討することを目的とした。

### II ライフストーリーインタビューの効果の実験的検討

#### 方法（研究1、研究2、研究3に共通の部分）

在宅高齢者12名、ケアハウス在住高齢者12名を対象としてそれぞれ前半後半各6名に

無作為に割り振ってライフストーリーインタビューを行い、前半の参加者をインタビュー群、前半の待機者を対照群として 2 要因の分散分析を行って効果を検討することを計画した。ところが、在宅、ケアハウスいずれにおいても入院や体調不良等によって対象者の脱落が生じ、追加募集をした。このように無作為配分が崩れたり対象者の補充ができなかったりしたため、群ごとにノンパラメトリック検定（フリードマンの検定）を行って効果を検討することとした。さらに後半にインタビューを実施した対象者を含めたインタビュー群を精神健康度によって健康群と低適応群に分けて検討した。

ライフストーリーインタビューは、1 回約 1 時間を 2 週間ごと計 6 回行った。効果を測定するために、EPSI と LSIK を介入前後と終了 2 か月後に施行した。精神健康度と性格特性を測定するために介入前に GHQ28 と Big5 短縮版を施行した。

## 結果

### 在宅高齢者への効果の検討（研究 1）

心理社会的発達を促す効果がある可能性が示された。しかし、効果は一律ではなく、精神健康度が高い場合には介入直後の効果だけでなく維持する効果もある可能性があるが、精神的ショックをもたらすような一過性の出来事等があれば、効果を阻害する可能性があることが示された。また、精神健康度が低い場合には上昇効果はなく、逆に低下させる影響を及ぼす可能性が示唆された。一方、主観的幸福感については、精神健康度の高低にかかわらずそれを高める可能性があるものの持続効果はない可能性が示唆された。

### ケアハウス在住高齢者への効果の検討（研究 2）

健康群の統合性に直後の効果の可能性が示唆された。その他のすべての群においてどの項目にも有意な効果は認められなかった。各群のサンプルサイズが小さいこともその要因と考えられた。

### 在宅高齢者とケアハウス在住高齢者を合わせたの検討（研究 3）

健康群（n=8）、低適応群（n=9）、対照群（n=9）に分けて検討した。分析はフリードマン検定と 2 要因の分散分析を用いて行った。その結果、健康群の統合性と EPSI 総得点それぞれに直後の効果と維持効果の可能性が、信頼性に向上維持効果の可能性が認められた。他方、低適応群の信頼性は低下する影響がある可能性が認められ、自主性が他の 2 群に比べて低水準になる影響がある可能性が認められた。

そして、心理社会的発達効果と性格特性の誠実性が低いこととの間に強い関連があることが示された。誠実性の要素特性は「統制性対自然性」と捉えられることから、誠実性が低いことは自然性要素が勝ってあるがままに物事を受容する態勢にあることを示す。

在宅とケアハウス在住者との比較では、在宅前後半合算インタビュー群（n=9）には LSIK に直後の効果の可能性が示唆された。

## 総合考察

**本研究の成果：**以上の結果から、ライフストーリーインタビューは精神的に健康な高齢者には統合を促し、精神健康度が低い高齢者には逆に自信と意欲を失わせるような影響をもたらす可能性があることが示された。また、誠実性が低いという性格特性を持つ高齢者に統合を促す効果が生じやすいことが示された。ライフストーリーインタビューによる刺激が、誠実性が低いことの要素特性である自然性要素が強い状態において心理社会的発達に促進効果をもたらしたものと考えられる。

主観的幸福感については在宅の対象者に直後の効果の可能性が示唆された。一方、ケアハウス在住者には効果が認められなかった。対象が居住するケアハウスの特別な事情が影響したことも考えられる。

そして、精神的に健康で特別な要因がなければ心理社会的発達に直後の効果も維持効果もある可能性があるが、主観的幸福感には維持効果はないことが示唆された。ライフストーリーインタビューには、対象者に自分の内面に向き合うことを促す機能とインタビューアとの相互関係性を作り出す機能の二つが想定される。この内面に向き合う機能が継続的に働いて心理社会的発達には維持効果がもたらされ、インタビュー終了後には相互関係性が薄れることによって主観的幸福感には維持効果が生じないという結果になったのではないと思われる。

従来の研究では、ライフストーリーインタビューが高齢者の心理社会的発達に及ぼす効果を量的に検討したものはなく、心理社会的発達への介入効果と性格特性との関係性を検討したものもなかった。

本研究には、以下のことを示し得たところに新奇性が存すると考える。

- (1) ライフレビューで用いられる発達段階に沿った質問や評価を促すような質問を意図的には行わないライフストーリーインタビューにも、高齢者の心理社会的発達を促す効果がある可能性を示したこと。
- (2) 高齢者の心理社会的発達に及ぼすライフストーリーインタビューの効果は精神健康度によって異なることを示したこと。
- (3) 高齢者の心理社会的発達に及ぼすライフストーリーインタビューの効果は誠実性が低いという性格特性を持つ高齢者に現れやすいことを示したこと。

**今後の課題と展望：**本研究には以下のような課題が残った。

第一は、無作為化比較試験による量的検討を計画したものの無作為な群の割り振りを行うことが出来ず条件の統制が困難であったことである。疾病の罹患や体調不良による対象者の脱落が続き当初の思惑通りには進まなかった。高齢者を対象とする研究においては量的な検討や質的な検討を併せて行う等研究の客観性を高める何らかの工夫が必要である。

第二に、精神健康度が低い対象者に信頼性や自主性が低下するという結果が現れたことから、ライフストーリーインタビューを行うに当たっては、対象者の精神健康度を確かめたいうえで、状態に見合ったやり方を考慮することが必要である。

一方、本研究の結果から、次のようなライフストーリーインタビュー活用の可能性が想定される。健康な高齢者のためには生涯教育講座への組み入れ、要介護などの虚弱な高齢者のためには、身体的支援に止まらない個々人に合った支援を検討する材料としての活用である。また、傾聴ボランティアのテーマにすることも考えられる。

発表論文：

矢吹章 ライフストーリーインタビューが高齢者の心理社会的発達に及ぼす効果。高齢者のケアと行動科学（査読あり），**23**。（2018年11-12月刊行予定）

矢吹章・三宅俊治 2015 エリクソン心理社会的発達段階目録（EPSI）の効用と限界—和文論文の検討—。吉備国際大学心理・発達総合研究センター紀要，**1**，98-108。

氏名	： 矢吹 章
学位の種類	： 博士 (心理学)
学位記番号	： 甲第心1-2号
学位授与の日付	： 平成30年3月22日
学位授与の要件	： 学位規程第4条第3項該当 (課程博士)
学位論文題目	： 高齢者の心理社会的発達に及ぼすライフストーリーインタビューの効果の検討
論文審査委員	主査： 森井 康幸 副査： 三宅 俊治 副査： 高橋 睦子 副査： 伊藤 義美
<p>審査結果の要旨</p> <p>本研究は、高齢者本人にとっても、聴き手（実施者）にとっても比較的負担の少ないと考えられるライフストーリーインタビューの方法を用いての自身の人生の振り返りが、高齢者の心理発達にいかなる効果をもたらすのか、“幸福な老い”という到達点に結びつくのかを、エリクソン心理社会的段階目録検査（EPSI）を主指標として検討したものである。従来こうした研究は、事例研究にとどまっておリ量的な検討は行われていない。そこで本研究の主たる目的は、高齢者の心理社会的発達と主観的幸福感に及ぼすライフストーリーインタビューの効果の量的な検討を行うことであり、結果は、精神的に健康な高齢者ではEPSIの「統合性」指標などにおいて促進的効果が得られるというものであった。</p> <p>問題点としては、表題の適切性が挙げられ、本研究において主要な観点と考えられる「主観的幸福感」の取り扱いに関するものであった。その他に本研究では、従来行われていない量的な検討を新規性の一つに挙げていたが、対象の高齢者が少なかったのは、募集が大変だったとしても、大きな問題と考えられる。対象者が少なかったためか、対象者の年齢も60歳代から80歳代まで区別されることなく扱われており、性あるいはジェンダーの違い、対象者の家族構成（同居配偶者の有無）による違いなど、結果に大きく影響すると考えられる要因について統制された量的検討ができていない。そのため、結果の分析、データに基づく論考の展開・客観性も弱いものになっている。</p> <p>以上のように、いくつかの不十分な点はあるものの、超高齢社会において大多数を占める元気な高齢者の生活の質向上のための支援法の一つとして、ライフストーリーインタビューの有効性とその適用範囲を示したことは非常に有意義であり、今後さらなる発展的研究・実践的応用へと繋がるものとの展望も示された。</p> <p>論文の評価としては、審査委員4名中2名が5段階評価（A～D）のB評価、残り2人がC評価であり、口頭試問についても、同席した3名が全員「良」評価であり、本学位審査委員会は一一致して、本論文が博士（心理学）の学位を授与するに値するものと評価した。</p>	